

相模女大 川村キミ子 東京家政学院短大 ○高野美栄 山梨県立女短大 小菅啓子 東京家政学院
短大 田原靖子 東京家政大 長塚こずえ 青葉学園短大 芦澤昌子

目的 現在我が国の急速な進歩発展は、著しい生活環境の変化を伴い多方面で歪みがみられる。ことに高齢者のライフ・ステージも変針を余儀なくされ、老年期における自己概念が問われる時代となった。そこで色彩表現の中から高齢者の被服をとりあげ、性別による嗜好色・嫌悪色、地域別相違点などを明らかにし、老年期の色彩感情と被服の色彩嗜好の関連性を検討した。

方法 1) 対象 1740名 2) 調査時期 3) 手続 4) 色彩の観察 8～9報と同様
5) 地域別 1群・447名(北海道・青森・宮城・山形), 2群・575名(埼玉・千葉・神奈川・山梨), 3群・234名(東京), 4群・454名(滋賀・京都・大阪・奈良・兵庫・香川・長崎) 6) 調査場所 敬老館11, 老人クラブ5, 老人ホーム2, 在宅ほか 7) 観察条件 北窓昼光, 晴天, 照度800Lx以上, 試料と目の距離30cm, 垂直上方から観察
8) 調査内容 嗜好色1色, 嫌悪色1色, 着装したい色1色

結果 被服の嗜好色は、男女ともPB系、男は暗い紫みの青、女は明るい灰青、次に男はN系、女はP系、これは潜在的な意識の違いによるものと思われる。被服の嗜好色と色彩の嗜好色では、女は同じ、男は明度差が大きく低い。嫌悪色では、R系あざやかな赤、YR系灰黄赤。地域別にみた嗜好色は、1～4群まではPB系である。1～3群までは暗い紫みの青であるが、4群は明るい灰青であり、これは気候風土の影響と考えられる。老年期の被服の色彩は従来 of 観念に左右されているが、しかし、徐々に個性豊かな色彩を求める傾向にあることがわかった。